

伊藤内閣總理大臣  
ト余ト全權辦理大臣  
臣ニ任命セラル

其時ニ應シテ更ニ評議ヲ盡スヘキコト、ス  
要之今日此局ヲ収結セムトスルニハ文武兩臣各其心ヲ  
一ニシ成算ヲ登守シテ深ク其秘密ヲ保チ外間ヲシテ毫  
モ之ヲ窺知セシメス終始一轍ニ之ヲ實行スルコトヲ要  
ス而シテ其談判ノ衝ニ當ル者ニ至テハ廟謨ヲ奉行スル  
ノ責ニ任スヘキモノナレハ其人ヲ選シテ大命ヲ下サ  
ル、コト一ニ 陛下ノ聖裁ニ是レ依ルヘキナリ  
以上奏陳スル所ノ梗概ハ謹テ 陛下ノ聖鑒ヲ仰クト同  
時ニ茲ニ列席セラル、所ノ文武兩臣ノ深ク省察ヲ加ヘ  
ラレムコトヲ乞フ  
皇上ハ親シク内閣總理大臣ノ上奏スル所ヲ聽納シ余カ捧  
呈セシ條約案ヲ閱覽シ給ヒ尙ホ列席文武重臣ノ意見孰レ  
モ異議ナキ旨ヲ聞食シタル後該案ヲ以テ講和條約ノ基礎  
トスヘキ旨 御裁可アラセラレ尋テ一月三十一日ニ於テ  
伊藤内閣總理大臣ト余トハ均シク全權辦理大臣トシテ清

清國張邵二使ノ來  
着

國使臣ト會商スヘントノ大命ヲ拜シタリ  
第十六章 廣島談判

明治二十八年一月三十一日清國講和使張蔭桓邵友濂ハ廣  
島ニ到着セリ我政府ハ斯ル場合ニ敵國使臣ヲ接待スヘキ  
總テノ準備ヲ爲シ置キ彼等カ廣島ニ到着スルヤ余ハ直ニ  
公文ヲ發シ我全權辦理大臣ノ官爵氏名ヲ知照シ尋テ全權  
辦理大臣ノ名ヲ以テ翌二月一日ヲ以テ廣島縣廳内ニ於テ  
會合スヘキ旨ヲ通牒セリ昨年以來清國政府カ只管ニ訴望  
シタル講和談判ハ茲ニ初テ其緒ヲ啓ケリ兩國全權大臣會  
同ノ期ハ既ニ二十四時間ノ後ニ迫リ講和ノ成否ハ一ニ双  
方全權大臣ノ材能ト談判其機ニ當ルト否トニ係レリ日清  
兩國カ長日月間ニ亘リタル戰爭ヲ息止シ茲ニ再ヒ東方局  
面ニ於テ平和ノ天地ヲ見ルヘキカ將タ談判不調ニ歸シテ  
戰爭尙ホ繼續スヘキカ喜劇カ悲劇カ其舞臺ハ將ニ明日ヲ  
以テ内外ニ向テ之ヲ開カムトスル時期ニ達シタリ

二百五十四

此時我國一般ノ人心ハ未タ戰爭ニ厭キタル氣色ナク只管講和尙ホ早シト叫ビ亦此際歐洲各強國カ何等ノ隱謀野心ヲ蓄ヘ居ルカヲ觀察スルニ違アラズ而シテ翻テ清國ノ内情如何ヲ推察スルニ彼等ハ講和ノ急務タルヲ覺悟シタルニ相違ナカルヘシ然レトモ張邵兩使臣ノ地位資望ニ視ルモ樽俎ノ間ニ周旋シテ敏速ニ事局ヲ妥結スヘキ膽識アリ權力アリトモ思レス之ヲ切言スレハ清國カ張邵ノ輩ニ托スルニ講和ノ重事ヲ以テスルハ彼等ハ尙ホ未タ敗者ノ位置ヲ自認シ正實ニ戰爭ノ息止ヲ欲スルノ誠意ニ乏シキカト疑ハレタリ清國使臣カ廣島來着ノ前數日伊藤總理ハ竊ニ余ヲ招キテ云フ今熟内外ノ形勢ヲ察スルニ講和ノ時機尙ホ未タ熟セス且ツ清國政府ノ誠偽亦甚々測知スヘカラサルモノアリ若シ吾儕注意一番ヲ缺ク時ハ講和ノ目的未タ達スルニ及ハス我國カ清國ニ要求セムトスル條件先ツ世間ニ流傳シ徒ニ内外ノ物議ヲ惹起スノ恐アリ故ニ吾儕

二百五十五

清國使臣ト會同ノ日ニ於テ審ニ彼等ノ材能及權限如何ヲ明察スルノ後ニ非スムハ容易ニ講和ノ端緒ヲ啓クヲ得ス且ツ顧フニ清國カ其使臣ニ付與スル全權ナルモノニ至テハ往々國際公法上ノ例規ト符合セサルモノアリ是亦吾儕カ深ク考察ヲ加ヘサルヘカラサル所ナリト余ハ恰モ伊藤總理ト同一ノ憂慮ヲ抱キ居タレハ言下ニ其說ニ同意シタリ因テ吾儕内議ノ結果ハ先ツ第一着ニ彼等カ携帶スル全權委任狀ノ形式如何ヲ吟味シ若シ果シテ國際公法普通ノ例規ニ缺ク所アレハ講和談判ノ本筋ニ立入ラサル前直ニ彼等ト談判ヲ繼續スルコトヲ拒絕シテ今回ノ會商ヲ不調トスヘシ斯クスレハ我ハ講和條件ヲ開示スルニ及ハスシテ談判ヲ破裂シ得ヘク而シテ他日清國カ真心悔悟シ再ヒ各爵資望ヲ有スル全權大臣ヲ派來スルノ時之ト會商スルモ亦決シテ晚カラスト云フニ歸シ徐ロニ會商ノ期日ヲ待アリ

翌二月一日午前十一時日清兩國全權大臣ハ廣島縣廳ニ於テ會合シタリ斯ル場合ノ例規トシテ第一着ニ彼此携帶スル全權委任狀ヲ査閲シ之ヲ交換スルノ手續ニ進メリ果然吾儕カ豫想シタル如ク清國使臣ハ國際公法上普通ノ全權委任狀ヲ帶有セザリシコトヲ發見シタリ彼等ハ第一番ニ彼等ガ國書(章尾附錄第一號)ト稱スル一書ヲ提出セリ是レ一種ノ信任狀ノミ決シテ全權委任狀ニ非ス今ヤ兩國交戰中ニ在テ平時ノ外交ハ既ニ斷絶シタルトキニ於テ一國ノ君主ヨリ對手國ノ君主ニ對シ其使臣ヲ紹介スル信任狀ヲ授受スヘキノ理由ナシ因テ我全權大臣ハ直ニ其理由ヲ述ヘ之ヲ彼等ニ返戻セリ次ニ清國使臣ハ勅諭(章尾附錄第二號)ト稱スル一書ヲ提出セリ是レ清國皇帝カ張邵兩全權ノ使事ニ就キ勅諭シタル命令書ノミ亦正式ノ全權委任狀ニ非ス且ツ右ノ命令書中ニハ張邵二人ヲ派シテ全權大臣ト爲シ日本國派出ノ全權大臣ト事件ヲ會商スヘント云ヒ又爾等ハ仍

ホ一面ニ總理衙門ニ電達シ朕ノ旨ヲ請テ遵行スヘント云フ等ノ文字アルニ據レハ彼等ハ實ニ斯ル場合ニ於テ普通ノ形式ヲ具有スル全權委任狀ヲ携帶セサルノミナラス其文中ニ事件ヲ會商スヘントハ果シテ何等ノ事件ナルヤ又一面ニ總理衙門ニ電達シ朕カ旨ヲ請テ遵行スヘント云ヘハ彼等ハ單ニ我政府ノ意見ヲ聽聞シ之ヲ總理衙門ニ通報シ更ニ該衙門ノ命令ヲ受ケ僅ニ談判ニ從事スル外何等ノ能力ナキモノタルコトヲ暴露セリ彼等ハ果然吾儕豫想ノ毅中ニ入り講和談判第一ノ關門ハ彼等ニ對シテ閉鎖セリ然レトモ吾儕ハ彼等ヲ茲ニ拒絕スルニハ先ツ彼等ヲシテ其全權ノ不備ナル事實ヲ自證セシムルニ如カスト思ヒ之ヲ爲サシムルハ彼等ヲシテ自ラ彼等カ携帶スル全權委任狀ノ權限ハ遙ニ日本全權大臣ノ權限ニ劣リタルコトヲ明言セシムルニ在リト爲シ豫メ此時機ノ準備トシテ一ノ覺書ヲ草シテ窃ニ之ヲ帶有シ居タリ因テ今彼此全權大臣カ

二百五十八

互ニ其全權委任狀ヲ交換セムトスルニ方リ直ニ該覺書ヲ取出シ之ヲ彼等ニ讀示シ其回答ヲ求メタリ其概要ニ曰ク日本全權辦理大臣カ只今清國欽差全權大臣ニ知照セシ所ノ全權委任狀ハ講和結約ノ件ニ付キ日本皇帝陛下ヨリ該全權辦理大臣ニ付與セラレタル一切ノ權限ヲ包含スルモノナリ就テハ他日ノ誤解ヲ避クル爲メ且ツ相互對等ノ主意ニ基キ日本全權辦理大臣ハ清國欽差全權大臣ヨリ知照セラレタル所ノ全權委任狀ハ未タ充分査閲ヲ經スト雖モ果シテ清國皇帝陛下ヨリ講和結約ノ件ニ付キ該欽差全權大臣ニ付與セラレシ一切ノ權限ヲ包含スルモノナルヤ否ヤ書面ヲ以テ確答アラムコトヲ望ムト彼等ハ無論即座ニ之ニ確答スル能ハス追テ何分ノ回答ヲ爲スヘシト云ヘリ此日兩國全權ノ會合ハ茲ニ終了シ翌二日清國使臣ハ余カ昨日交付シタル覺書ニ對スル回答トシテ一ノ公文ヲ送レリ其概要ニ曰ク本大臣ハ本國皇帝ヨリ講和締結ノ爲メ條

廣島談判第二回

伊藤全權辦理大臣ノ演説

二百五十九

款ヲ會商シ記名調印ノ全權ヲ與ヘラレタリ議スル所ノ各條款ハ迅速ニ辦理ヲ期スルヲ以テ電信ニテ本國ニ奏聞シ勅旨ヲ請ヒ期ヲ定メ調印シ其上ニテ議定セシ條約書ヲ齎ラシ中國ニ歸リ恭テ皇帝親ヲ披閱ヲ加ヘ果シテ妥善ナリトシテ批准セララル、ヲ待テ之ヲ施行スヘキモノトス」ト是ニ至リ彼等ハ全權大臣トシテ獨斷專對ノ權力ヲ有セサルコトヲ自白セリ吾儕ノ豫想ハ果シテ正鵠ニ射中セリ今ハ毫モ顧慮スル所ナシ即チ同日午後四時ヲ期シ再ヒ廣島縣廳ニ會合スルコトヲ約シ席上伊藤全權ハ左ノ演説ヲ爲セ

本大臣カ今同僚ト俱ニ將サニ採ラムトスル處置ハ論理上止ムヲ得サルノ結果ニ出ツルモノニシテ其實素ヨリ本大臣等ニ歸スヘキニ非ス

從來清國ハ殆ト列國ト全然睽離シ時ニ或ハ列國ノ社團ニ伍伴スル爲メ生スル所ノ利益ヲ享受シタルコトアル

モ其交際ニ隨伴スル責守ニ至テハ往々自ラ顧ミサルコトアリ清國ハ常ニ孤立ト猜疑トヲ以テ其政策トス故ニ外交上ノ關係ニ於テ善隣ノ道ニ必要トスル所ノ公明信實ヲ缺クヤ宜ナリ

清廷ノ欽差使臣カ外交上ノ盟約ニ付キ公然合意ヲ表セシ後却テ飄然之ニ調印スルヲ拒ミ或ハ儼然已ニ締結シタル條約ニ向テ更ニ明白ナル理由無ク漫然之ヲ拒否セラルノ實蹟一ニシテ足ラス

右等ノ實蹟ニ就テ之ヲ徵スルニ當時清廷ノ意中操持スルノ誠實ナク其談判ノ局ニ當レル欽差使臣ニ至テモ復必要ナル權利ヲ委任セラレサルコト比々皆然ラサル無キヲ見ルヘシ

故ニ今日ノ事アルニ當リ我政府ハ先ツ既往ノ事實ニ鑑ミ全權ノ定義ニ協ハサル清廷ノ欽差使臣トハ一切談判ヲ避クルノ決意ヲ以テ講和談判ヲ開カムトセハ清廷ノ

委任者ハ講和締結ニ對スル全權ヲ有セサルヘカラサル事ヲ以テ豫メ一ノ條件ト爲シタリ而シテ清廷ハ此條件ヲ格遵シ其全權使臣ヲ我國ニ派遣セラレタリトノ保證ヲ確メ我 天皇陛下ハ本大臣并ニ同僚ニ委任スルニ清廷ノ全權者ト講和條約ヲ締結シ之ニ調印スルノ全權ヲ以テセリ

清廷ハ既ニ此確保ヲ爲シタルニ拘ラス兩閣下ノ委任權甚々不完全ナルハ清廷ノ意思未タ和ヲ求ムルニ切實ナラサルヲ證認スルニ足ル

昨日此席ニ於テ交換シタル双方ノ委任狀ハ一見以テ其軒輊ノ甚シキヲ知ル殆ト批判ヲ待タスト雖モ茲ニ之ヲ指摘スルモ敢テ徒爲ノ業ナラサルヲ信ス即チ一ハ開明國慣用ノ全權ノ定義ニ適シ他ハ全權委任ニ須要ノ諸項幾ト缺乏シタリ加之兩閣下カ携帶スル委任狀ハ閣下等カ談判セラルヘキ事項明瞭ナラス又何等訂約ノ權利ヲ

二百六十二  
與ヘラレス且ツ兩閣下ノ行爲ニ對シ清國皇帝陛下事後  
ノ批准ニ付テモ一言スル所ナシ之ヲ要スルニ閣下等ニ  
委任セラレタル職權ハ本大臣及同僚カ陳述スル所ヲ聞  
テ之ヲ貴政府ニ報道スルニ止マルモノト云ハサルヘカ  
ラス事既ニ茲ニ臻ル本大臣等ハ決シテ此上談判ヲ繼續  
スル能ハサル所ナリ  
或ハ云フ今回ノ事ニ於テハ敢テ清國從來ノ慣例ニ背キ  
タル者ニ非スト本大臣ハ斷シテ此ノ如キ説明ヲ以テ滿  
足スルコト能ハス清國內地ノ慣例ハ本大臣素ヨリ之ニ  
容喙スルノ權ナシ然リト雖モ我國ニ關連スル外交上ノ  
案件ニ至テハ清國特殊ノ慣例ハ國際上ノ法則ノ爲メ裁  
抑ヲ受ケサルヘカラサルコトヲ主張スヘキハ獨リ本大  
臣ノ權利ナルノミナラス亦本大臣ノ義務ナリト信ス  
抑平和ノ克復ハ至重至大ノ事タリ今再ヒ輯睦ノ道ヲ啓  
カムトセハ固ヨリ其目的ヲ達スル爲メ條約ヲ締結スル

ノ必要アルノミナラス其互ニ訂約スル所ハ亦必ス之カ  
實踐ヲ期スルノ誠衷ナカルヘカラス  
講和ノ事ニ關シ我帝國ハ進テ之ヲ清國ニ請求スヘキ理  
由ヲ見スト雖モ我帝國ハ其代表セル文明主義ヲ重ムス  
ルヲ以テ清廷カ至當ノ道軌ヲ履ミ其緒ヲ啓キ來ルニ於  
テハ之ニ應スル義務アリト信ス然リト雖モ無効ノ談判  
若クハ紙上ノ空文ニ止マル講和ニ參與スルカ如キハ將  
來堅ク之ヲ謝絶スル所ナリ我帝國ハ一旦締結シタル所  
ノ條件ハ必然之ヲ實踐スヘキヲ明言スルト同時ニ清國  
ニ向テモ亦此ノ如ク其履行ノ確然ナルヲ期セサルヘカ  
ラス  
此故ニ清國カ切信誠ニ和ヲ求メ其使臣ニ委ヌルニ確  
實ノ全權ヲ以テシ且ツ其締結セル條約ノ實踐ヲ擔保ス  
ルニ足ルヘキ名望官爵アル者ヲ擇ムテ此ノ大任ニ當ラ  
シムルニ於テハ我帝國ハ更ニ談判ニ應スルヲ拒マサル

ヘシ  
伊藤全權ノ演説ハ議論劃切事理明白ニシテ別ニ註解ヲ要  
セス余ハ右ノ演説了ルヤ豫メ草シテ帶有シ居タル一ノ覺  
書ヲ取り出し之ヲ清國使臣ノ前ニ朗讀シ今回ノ談判ハ茲  
ニ斷絶スルノ意ヲ確示シタリ其概要ニ曰ク日本政府ハ嘗  
テ屢東京及北京ニ駐劄スル米國特命全權公使ヲ經由シテ  
清國カ和睦ヲ講セムトセハ條約締結ノ全權ヲ帶有スル委  
員ヲ簡命スヘキコトヲ聲明シタリ然ルニ本月一日清國欽  
差全權大臣ヨリ知照セラレタル命令狀ハ其之ヲ發セラレ  
タル所以ノ目的ニ對シ極メテ妥當ヲ缺クモノト爲サハル  
ヲ得ス何トナレハ該命令狀ニハ普通ニ全權委任狀ニ須有  
スル諸要素ハ殆ト缺乏スレハナリ而シテ日本政府ノ所見  
ハ今尙ホ曩ニ米國公使ヲ經由シテ聲明セシ所ト相異ナル  
コトナシ因テ日本國皇帝陛下ヨリ授與セラレタル適當ニ  
シテ完備ナル全權委任狀ヲ帶有スル日本帝國ノ全權辦理

大臣ハ單ニ事件ヲ會商シ總理衙門ヘ咨報シ時々其旨ヲ請  
フテ遵行スベシトノ命令狀ノミヲ帶有スル清國欽差全權  
大臣トハ會商スルヲ承諾スル能ハス是ヲ以テ日本帝國全  
權辦理大臣ハ今回ノ談判ハ此ニ停止セサルヲ得スト宣言  
スルノ外ナキニ至レリト清國使臣ハ餘リニ驚愕シタルニ  
ヤ又ハ我論理ノ争フヘカラサルヲ悟リタルニヤ彼等ハ唯  
若シ彼等カ携帶スル全權委任狀不完備ノ廉アルニ於テハ  
更ニ本國政府ニ電稟シテ完備ナル全權ヲ付與セラルハ様  
請求スヘケレハ其上再ヒ商議ヲ開カムコトヲ乞フトノ一  
事ヲ言出セルノミ然レトモ我ニ在テハ一回既ニ談判ヲ繼  
續スルヲ拒ミタル清國使臣ニシテ徒ニ本國政府ノ再命ヲ  
待タシムルノ要ナケレハ其意ヲ以テ之ヲ拒絕シタリ因テ  
彼等ハ其他二三重要ナラサル問答ヲ爲シタル後竟ニ長崎  
ニ退去シ同所ニ於テ歸國ノ便船ヲ待ツコトハナレリ然ル  
ニ清國講和使隨行員中ニ伍廷芳ナル者アリ彼ハ元來李鴻

伊藤全權大臣カ伍  
廷芳ヘノ私話

章ノ幕下ニシテ伊藤全權カ明治十八年天津ニ赴キタル時  
ヨリノ知人ナリ今清國使臣ノ一行カ將ニ會堂ヲ去リ戸外  
ヘ出ムトスルノ際伊藤全權ハ特ニ伍ヲ喚留シ李鴻章ヘ傳  
言ヲ依托スルト同時ニ稱將來我政府カ執ルヘキ意向ヲ漏  
示シタリ即チ伊藤全權ハ伍ニ向ヒ足下歸國ノ上李中堂ニ  
余カ最モ誠實ナル傳言ヲ致セ而シテ李中堂ヲシテ今回吾  
儕カ清國使臣ト談判ヲ繼續スルヲ拒ミタルハ決シテ日本  
國カ亂ヲ好ミ治ヲ惡ムノ故ニ非サルコトヲモ善ク領會セ  
シメヨ吾儕ハ兩國ノ爲メ特ニ清國ノ爲メ一日モ速ニ平和  
ヲ回復スルヲ肝要ト思フ故ニ若シ清國ニシテ眞實ニ平和  
ヲ希望シ正當資格アル全權使臣ヲ命スルニ於テハ吾儕ハ  
談判ヲ再開スルコトヲ躊躇セサルヘシ元來清國ニハ許多  
ノ慣例舊典アリテ北京政府ヲシテ萬國普通ノ例規ヲ遵守  
スル能ハサラシムルコト多シト雖モ吾儕ハ今回ゴソ清國  
カ國際公法上ノ常規ニ因テ事物ヲ措置セラレムコトヲ望

二百六十六

ム是レ余ハ足下ト天津以來ノ舊交アルニ依テ聊カ私談ヲ  
試ルノミ敢テ清國使臣ニ對シ公言スヘキ限リニ在ラスト  
云ヘリ伍ハ感謝ノ意ヲ表シタル後閣下ノ眞意ヲ十分了解  
スル爲メ茲ニ閣下ノ明言ヲ乞フハ閣下ハ今回渡來ノ清國  
使臣ノ官位名望ニ就キ故障ヲ懷カル、ニ非サヤト云フ伊  
藤全權ハ否元來我政府ハ何人ニテモ正當ナル全權委任狀  
ヲ帶有スル人ニ對シ之ト開談スルコトヲ拒ムモノニ非ス  
然レトモ無論ニ其人ノ爵位名望ノ愈高ケレハ談判ノ都合  
ハ愈宜シガルヘシ而シテ若シ清國政府ニ於テ何等故障ニ  
由リ高爵大官ノ人ヲ全權大臣トシテ日本ニ派遣セシムル  
コト能ハサルノ事情アルトキハ吾々ヨリ清國ニ往クモ亦  
不可ナカルヘシ例ヘハ恭親王若クハ李中堂ノ如キ人ニシ  
テ此任命ヲ受クルニ於テハ頗ル好都合ナルヘシ何トナレ  
ハ總テ彼此談判ノ結果ハ單ニ紙上ノ空文ニ止ラス必ス之  
ヲ實行シ得ル有力者ヲ要スレハナリト答ヘタリ是レ一場

二百六十七

ノ談話ノミ然レトモ他日李鴻章カ自ラ清國全權使臣トシ  
テ下ノ關ニ來航スルニ至リタルハ此間一縷ノ消息ヲ存ス  
ルモノナクムハアラス故ニ茲ニ其大要ヲ記ス  
斯クテ張邵兩使臣ノ使事ハ僅々兩日間ニ見事ニ失敗セリ  
彼等ハ直ニ廣島ヲ出發シテ長崎ニ退去スルノ已ムヲ得サ  
ルニ至レリ然ルニ北京政府ニ於テハ講和談判不調トナリ  
タルヲ遺憾トセシニヤ二月七日ヲ以テ在北京米國公使ニ  
依頼シ在東京米國公使ヲ經テ左ノ電信ヲ我政府ニ送致セ  
リ其概要ニ曰ク總理衙門ハ昨日張邵兩全權大臣ヨリ電信  
ヲ接手セリ右電信ニ據レハ日本政府ハ委任狀中講和條約  
ヲ締結調印スルコトニ關スル權限ヲ明記セサリシトテ異  
議ヲ起シ該全權大臣等ト談判スルコトヲ肯セス是ヲ以テ  
張邵二氏ハ長崎ヘ送致セラレタリト云フ然ルニ該全權大  
臣ニ付與シタル信任狀中ニ「全權」ノ語アルヲ以テ條約ヲ  
締結シ且ツ之ニ調印スルニ十分ナリト思考ス蓋シ此語

一切ノ事ヲ包含スルヲ以テ別ニ一々之ヲ詳記スルノ必要  
ヲ見ス然レトモ日本國ニ於テ右信任狀ノ効力ニ付キ疑惑  
ヲ抱クトナレハ清國ハ之ヲ更改スルコトヲ拒マサルヘシ  
尤兩國全權大臣ハ其議定シタル條約ニ調印シ而シテ該條  
約ハ其批准交換ヲ了ル前ニ皇帝ノ認可ヲ待チ然ル後始テ  
有効ナルヘシ等ノ事項ヲ信任狀ニ明記スルコト、ナスヘ  
シ而シテ此改訂ヲ加ヘタル信任狀ヲ張邵ニ送附シテ以テ  
日本國當該官吏ヘ差出サシムヘシ又該信任狀ヲ日本國ヘ  
送致スルニハ多少ノ日子ヲ要スル故ニ前記ノ趣旨ヲ委細  
日本政府ヘ電照セラレ張邵ハ目下長崎ニ滯在中ナレハ再  
ヒ右兩氏ト開談スル機閣下ヨリ日本政府ヘ請求セラレタ  
シト然レトモ我政府ハ既ニ一旦談判ヲ拒絕シタル清國使  
臣ヲシテ本國ヨリ更ニ委任狀ヲ取寄セシメ之ト再ヒ會商  
スルノ適當ナラサルヲ知ルノミナラス當時國民一般ノ批  
評ハ政府カ今回清國使臣ト會商ヲ拒絕シタルヲ以テ頗ル

愉快ノ事トシ中ニハ稍失當ナル語氣ナレトモ清國講和使  
ヲ放逐シタルハ近來政府ノ英斷ナリナト稱シ此措置頗ル  
人意ニ愜フノ際ニ於テ徒ニ彼等ヲ繫留シ再ヒ會商ヲ開ク  
ハ事情ノ容サ、ル所ニシテ且ツ張邵ノ如キ清國ニ於テ勢  
力資望ナキ輩カ如何ナル全權委任ヲ受ケタリトテ到底滿  
足ナル談判ヲ成就シ得ヘキ望ミナシ故ニ今ハ寧ロ内外ノ  
事情ニ照シ斷然張邵ヲ拒絕シ他日ノ好機ヲ待チ更ニ講和  
ノ端緒ヲ啓クニ若カスト思考シタルヲ以テ更ニ二月八日  
在東京米公使ヲ經由シ在北京同公使ヲシテ左ノ意ヲ清國  
政府ニ致サシメタリ曰ク日本政府ハ若シ清國政府ニシテ  
誠意ニ平和ヲ希望シ正當ナル全權委任狀ヲ帶有スル名爵  
資望アル全權委員ヲ派來スルニ於テハ何時モ再ヒ講和談  
判ヲ開クヘシト雖モ一旦談判不調トナリタル今回ノ使節  
ヲシテ本國政府ノ訓令ヲ待ツ爲メ日本國ニ滞在セシムル  
コトハ承諾スル能ハサル所ナリト下事此ニ及ヒテ彼等ハ最

張邵二使ノ歸國

早何ノ爲ス所アル能ハサルヲ知り張邵一行ハ二月十二日  
ヲ以テ長崎ヲ出帆シ歸途ニ就ケリ廣島談判ハ茲ニ終了ヲ  
告ケタリ

(附錄第一號)

大清國大皇帝ハ大日本國大皇帝ノ好ヲ問フ我兩國、同州ニ屬シ  
兼ト嫌怨ナカリシニ近頃朝鮮ノ一事ヲ以テ彼此兵ヲ用キ民ヲ勞  
シ財ヲ傷フハ誠ニ已ムヲ得サルニ非ス現ニ米國カ間ニ居リ調處  
スルヲ經ルニ因リ中國ヨリ全權大臣ヲ派シ貴國ヨリ全權大臣ヲ  
派シ會商シテ妥カニ局ヲ結ハム爲メ茲ニ特ニ尙書街總理各國事  
務大臣戶部左侍郎張蔭桓、頭品頂戴署湖南巡撫邵友濂ヲ派シ全權  
大臣ト爲シ貴國ニ前往シテ商辨セシム惟、願フ大皇帝接待セラレ  
談使臣ヲシテ以テ職ヲ盡スヘカラシムルコトヲ是レ望ム所ナリ  
(附錄第二號)  
尙書街總理各國事務大臣戶部左侍郎張蔭桓、頭品頂戴署湖南巡撫  
邵友濂ヲ派シテ全權大臣ト爲シ日本ヨリ派出ノ全權大臣ト事件  
ヲ會商スヘシ爾ハ仍ホ一面ニ總理衙門ニ電達シ朕ノ旨ヲ請フテ  
遵行スヘシ隨行ノ官員ハ爾ノ節制ニ聽カスヘシ爾其レ精誠ヲ輝  
竭シ隨テ事ヲ行ヒ委任ニ負ムコト勿レ爾其レ之ヲ慎メヨ特ニ  
諭ス